

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
（分担研究報告書）
医療従事者のための障害者対応研修プログラムに関する研究

研究代表者	八巻知香子	国立がん研究センター	がん対策研究所	室長
研究分担者	飛松 好子	国立障害者リハビリテーションセンター		顧問
研究分担者	河村 宏	特定非営利活動法人支援技術開発機構		副理事長
研究分担者	打浪 文子	立正大学社会福祉学部		准教授
研究分担者	山内智香子	滋賀県立総合病院	がん相談支援センター	長
研究協力者	原田 敦史	堺市立健康福祉プラザ	視覚・聴覚障害者センター	点字図書館長
研究協力者	皆川 愛	ギャローデット大学	ろう健康公平センター	研究員
研究協力者	小松 智美	大塚ろう学校	看護師	手話通訳士
研究協力者	平 英司	関西学院大学	手話言語研究センター	専門技術員
研究協力者	志賀久美子	国立がん研究センター	がん対策研究所	看護師
研究協力者	羽山 慎亮	国立がん研究センター	がん対策研究所	特任研究員

研究要旨

障害者支援専門機関がもつ支援技術を医療機関で応用・普及させる方法を提示し、がん罹患した障害者が安心してがん治療を受けられるような、医療従事者向けの障害者対応研修プログラム開発を実施した。研修プログラム受講によって、障害者支援についての知識を吸収するのみならず、障害のある当事者の実際の体験談を学ぶことで、分かりやすいコミュニケーションや配慮などについてのイメージを持つことが可能になったことが窺えた。

A. 研究目的

障害者の高齢化が進んでいることから、相当数の障害のある人ががん罹患していることが予想されるものの、障害のあるがん患者やその家族にとって、また受け入れる医療従事者にとってどのような困難があるのかは十分に明らかになっていないといえない。

また、がん医療を担う医療機関の大多数において、様々な障害のある人の支援方法についての知識と経験の蓄積が不十分である。これまで行われてきた調査では、がん医療機関では障害のあるがん患者に何らかの配慮が必要であると感じながらも、障害者支援の専門機関と医療機関との連携もなく、何をどうすればよいのかについての情報を持ち合わせていない状況がうかがえる。

そのような中、令和4年8月に改訂されたがん診療連携拠点病院等の整備指針では、「障害のある患者」への対応として、「④地域連携の推進体制 高齢のがん患者や障害を持つがん患者について、患者や家族の意思決定支援の体制を整え、地域の医療機関との連携等を図り総合的に支援すること。」が盛り込

まれた。また、厚労省がん・疾病対策課の事務連絡「がん診療連携拠点病院等の整備に関する指針に関するQ&Aについて（R4.9.22）」では、がん相談支援センターの業務として、「⑤ 障害のある患者への支援に関する相談」が盛り込まれている。

そのため、一定以上の障害者支援スキルを有する医療機関・医療従事者の存在が求められよう。

以上から、障害者支援専門機関がもつ支援技術を医療機関で応用・普及させる方法を提示し、がん罹患した障害者が安心してがん治療を受けられるような、医療従事者向けの障害者対応研修プログラムの開発を目的とする。

本稿では、これらの研修プログラムについて、一定程度の理論的枠組みと実践的有効性を持ちうる内容構成、研修方法、研修の評価等について述べることにしたい。

B. 研究方法

1) 内容の精選

【研修プログラムの基本構成】

医療従事者向けの障害者対応の研修プログラムは、これまでの調査研究の結果ならび、今まで開発・作成した、様々な障害のある人が利用可能な資料内容、障害者支援専門機関がもつ支援技術を医療機関で応用・普及させるための医療従事者向けのサポートガイド作成で得られた知見をふまえて、障害者支援についての全般的な内容から導入し、それぞれの障害(知的・視覚・聴覚)について学ぶ内容とした。

	セッション名	主な内容
1	はじめに：障害のある人が受診したら	<ul style="list-style-type: none"> ・共生社会の実現 ・支援技術の必要性 ・発想の転換
2	視覚障害の場合	<ul style="list-style-type: none"> ・見え方はそれぞれによって様々であること ・移動面での困難性 ・目で見たものを音声で説明することの必要性
3	聴覚障害の場合	<ul style="list-style-type: none"> ・人によってコミュニケーションやニーズは様々 ・視線を合わせることの重要性 ・筆談の際のポイント ・非常時の対応
4	知的障害の場合	<ul style="list-style-type: none"> ・知的障害もさまざま ・事前の説明・体験で見通しをもたせる ・わかりやすい言葉のポイント

それらを基本とし、3点の研修プログラムを構成した。

【それぞれの特色】

①知識にふれるタイプの研修

時間：30分

目的：障害者支援について、知っておいた方がいい知識を学ぶ。何らかのきっかけで、障害者支援の在り方や障害者の存在に気づけるようになる。

②知識と障害のあるがん患者当事者の声から学ぶタイプの研修

時間：1時間

目的：それぞれの障害について学ぶとともに、障害のあるがん患者当事者の体験から、対応できること

や配慮すべきことについて考えることができる。

③より深く学ぶタイプの研修

時間：2時間

目的：障害のあるがん患者さんに対応するにあたって配慮すべきことと、容易に参考にできる対応法を学び、障害のあるがん患者当事者や日常の支援者、家族の立場からの「想像力をもってもらえる」ようなエピソード的な情報から、ニーズや対応に想像を広げられたり日ごろの業務に活かせるような実践スキルを身につける。

なお、研修講師は「障害のあるがん患者のニーズに基づいた情報普及と医療者向け研修プログラムの開発に関する研究」に携わってきた研究分担者、研究協力者である障害者支援専門機関の関係者、障害のあるがん患者当事者が担当した。

2) 研修効果の検証

①知識にふれるタイプの研修

実施期間：2022年12月20日（火）17時30分～18時

研修形態：ハイブリッド型開催

対象：国立がん研究センター医療従事者スタッフ34名（会場参加者2名、WEB参加者32名）

実施内容：

	テーマ	時間
1	はじめに：障害のある人が受診したら（知識）	5分
2	視覚障害の場合（知識）	5分
3	聴覚障害の場合（知識）	5分
4	知的障害の場合（知識）	5分

研修評価：

「内容のわかり易さ」「スライドのわかり易さ」「内容はためになったか」「講義全体の評価」「講義の長さ」に対する設問で、それぞれ5段階評価の選択肢を設定した。また、研修会参加の感想を自由記述で求めた。研修会終了後に回答任意のアンケートとして実施した。

②知識と当事者の声から学ぶタイプの研修

実施期間：2023年3月16日（木）18時～19時

研修形態：ハイブリッド型開催

対象：滋賀県立総合病院の医療従事者38名

実施内容：

	テーマ	時間
1	はじめに：障害のある人が受診したら（知識）	10分
2	視覚障害の場合（知識）	10分
3	知的障害の場合（知識）	10分
4	聴覚障害の場合（知識と聴覚障害当事者の体験）	10分

研修評価：

(1)回答者の属性（所属機関・職種）、(2)「理解しやすさ」「知らないことを新しく知ることができたか」「研修内容を日常の業務に役に立てられるか」に対する設問で、5段階評価による選択肢を設定した。(2)においては、①の研修評価をもとにして、新たに知識を吸収することができたかどうか、今後の業務に役立てられるかどうかを問うための項目を設けた。(3)研修受講にて、参考になったこと、初めて知ること、日頃の業務に活かせると感じたことを自由記述回答で求めた。

研修会終了後に回答任意のアンケートとして実施した。

③より深く学ぶタイプの研修

実施期間：2023年3月7日（火）17時～19時

研修形態：オンライン（Zoomウェビナー形式）

対象：全国のがん相談支援センター相談員 189名。

また、関心のある医療者は誰でも参加可とした。

実施内容：

	テーマ	時間
1	はじめに：障害のある人が受診したら（知識）	20分
2	視覚障害の場合：視覚障害当事者の体験から	25分
3	視覚障害の場合（知識）	
4	聴覚障害の場合（知識＋聴覚障害当事者の体験）	25分
5	知的障害の場合（知識）	25分
6	知的障害の場合：事例提供	

研修評価：

(1)回答者の属性（所属機関・職種）、(2)「理解しやすさ」「知らないことを新しく知ることができたか」「研修内容を日常の業務に役に立てられるか」

に対する設問で5段階評価による選択肢を設定した。(3)研修受講にて、参考になったこと、初めて知ること、日頃の業務に活かせると感じたことを自由記述回答で求めた。

研修会終了後に回答任意のアンケートとして実施した。

（倫理面への配慮）

本研究の対象は個人ではなく、介入を行わず人体から採取された試料や要配慮個人情報を取得しないため、研究倫理審査を必要とする内容ではない。研修評価についてのアンケートへの回答は任意とし、個人を特定できる情報を取得しない無記名のアンケートとした。

また、研究結果の報告、発表に関しては個人を特定される形では公表しない。

C. 研究結果

1) 評価

①の研修評価：17名から回答が得られた。「内容のわかり易さ」「スライドのわかり易さ」「内容はためになったか」「講義全体の評価」について、もっとも多かった評価は「非常に良い」であった(表1)。

「とても勉強になっただけに、いい意味で、もっと時間があれば」といった、研修会参加についての自由記述の感想(表2)から、知識にふれるタイプの研修にて、障害者支援について関心をよせることができたことが窺える。

②の研修評価

(1)回答者の属性：回答者は16名であり、職種について尋ねた結果、医師が5名(31.2%)、看護師が3名(18.8%)、医療ソーシャルワーカーが1名(6.2%)、事務職3名(18.8%)、その他／無回答が4名(25.0%)であった。

(2)研修内容(表3)：

1) 理解しやすさ

回答者16名のうち、「とても理解しやすかった」が13名(81.2%)、「理解しやすかった」が2名(12.5%)、「どちらとも言えない」が1名(6.3%)

であった。

2) 知らないことを新しく知る

知らないことを新しく知ることができたかどうかについて、16名のうち、「初めて知ることがとても多かった」が10名（62.5%）、「初めて知ることがそれなりにになった」が5名（31.3%）、「初めて知ることが少しあった」が1名（6.3%）であった。

3) 日常の業務に役立てられるか

研修内容が日常業務の役に立つと思うかどうかについて、「とても役に立つと思う」が13名（81.2%）、「まあまあ役に立つと思う」が2名（12.5%）、「どちらともいえない」が1名（6.3%）であった。

(3) 研修受講にて、参考になったこと、初めて知ること、日頃の業務に活かせると感じたこと(表4)：

「つい本人ではなく、隣にいる人に話しかけてしまいます。患者本人さまの目を見て話して欲しいと言われ、ハッとしました。」「患者さんが理解できるか確認しながら対応していくことが大切と再確認しました。」などの自由記述回答から、知識と当事者の声から学ぶタイプの研修にて、障害者への対応について気づかされた、再確認できたといえよう。

③の研修評価

(1) 回答者の属性：回答者は111名であり、そのうち、都道府県がん診療連携拠点病院（国指定）に所属する人が25名（22.5%）、国指定の地域がん診療連携拠点病院に所属する人が72名（64.9%）、都道府県が指定するがんの拠点病院に所属する人が7名（6.3%）、上記以外の医療機関に所属する人が5名（4.5%）、医療機関以外の機関に所属する人が2名（18.0%）であった。職種について、複数回答で尋ねた結果、看護師が49名（44.1%）、がん専門相談員が44名（36.9%）、社会福祉士・精神保健福祉士が33名（29.7%）、事務職10名（9.0%）、公認心理師・臨床心理士が6名（5.4%）、医師が5名（4.5%）、その他の医療従事者3名（2.7%）であった。

(2) 研修内容（表5）：

1) 理解しやすさ

回答者111名のうち、「とても理解しやすかった」

が71名（64.0%）、「理解しやすかった」が37名（33.3%）、「どちらとも言えない」が3名（2.7%）であった。

2) 知らないことを新しく知る

知らないことを新しく知ることができたかどうかについて、111名のうち、「初めて知ることがとても多かった」が47名（42.3%）、「初めて知ることがそれなりにになった」が53名（47.7%）、「初めて知ることが少しあった」が11名（9.9%）であった。

3) 日常の業務に役立てられるか：

研修内容が日常業務の役に立つと思うかどうかについて、「とても役に立つと思う」が84名（75.7%）、「まあまあ役に立つと思う」が26名（23.4%）、「どちらともいえない」が1名（0.9%）であった。

(3) 研修受講にて、参考になったこと、初めて知ること、日頃の業務に活かせると感じたこと(表6)：

自由記述内容から【当事者の声からの学び】、【患者さんの立場になる・本人を尊重する】、【マニュアルの必要性】、【知的障害】、【視覚障害】、【聴覚障害】、【分かりやすい伝達の必要性】、【コミュニケーションの必要性】、【困りごとやニーズへの具体的な対応】、【障害のある患者さんが利用しやすい・安心しやすい環境づくり】、【災害時の対応】といったカテゴリーに分類された。障害のあるがん患者さん当事者の方から説明があったことで、具体的な援助方法についてイメージできた面が大ききようであった。

D. 考察

本研究で開発した、医療従事者のための障害者対応研修プログラムは、非常に良く、なおかつ理解しやすく、初めて知ることがとても多かったという評価が得られた。

八巻他（2022）によると、障害者の医療機関受診時における困難さは、医療従事者が障害のある患者に接する機会の少ない、理解する機会がないことによって生じていると推察されている。そのため、対応の基本姿勢や、コミュニケーション方法などについての教育機会を提供すること、障害のある当事者

本人や福祉分野（障害者支援専門機関など）からの「ニーズを伝える」ことを組み合わせた研修プログラムはより多くのことを伝え、直感的にも納得できる点で望ましいと考えられよう。長時間の研修の方がより多くの内容を取り込むことができ、充実した内容になることは確かだが、受講者の時間的な負担が大きくなる。受講対象者により、これらのプログラムのいずれを採用するのが適切であるかは異なるであろう。作成したプログラムを多くの医療機関で利用しやすくするよう、E-learning教材等として普及させていくなどの活用も、後続研究班の課題となると考える。

1. 特許取
特になし

2. 実用新案登録
特になし

3. その他
特になし

E. 結論

今回の研修プログラムは、障害のあるがん患者が来院されたときに対応する医療従事者へのサポートとして有用であり、それらによって障害者が安心できる医療機関受診時の環境づくりに寄与できるものと考えられる。

（謝辞）

本研修プログラムにご協力いただいた、視覚障害者総合支援センターちばの高橋恵子様、公益財団法人日本訪問看護財団松山相談支援センターの西村幸様、がんば豊の皆川明子様に記して感謝を申し上げます。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

（発表誌名巻号・頁・発行年等も記入）

1. 論文発表

特になし

2. 学会発表

特になし

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む）

表1 知識にふれるタイプの研修の評価

質問項目	回答項目	人数 (人)	割合 (%)
講義内容のわかり易さ	非常に良い	9	(53.0)
	良い	5	(29.4)
	適度	3	(17.6)
	悪い	0	(0.0)
	とても悪い	0	(0.0)
スライドのわかり易さ	非常に良い	9	(53.0)
	良い	6	(35.3)
	適度	2	(11.7)
	悪い	0	(0.0)
	とても悪い	0	(0.0)
内容はためになったか	非常に良い	10	(58.9)
	良い	3	(17.6)
	適度	4	(23.5)
	悪い	0	(0.0)
	とても悪い	0	(0.0)
講義全体の評価	非常に良い	7	(41.2)
	良い	5	(29.4)
	適度	5	(29.4)
	悪い	0	(0.0)
	とても悪い	0	(0.0)
講義時間の長さ	長すぎる	0	(0.0)
	長い	0	(0.0)
	適度	9	(53.0)
	短い	4	(23.5)
	短すぎる	4	(23.5)

表2 研修への意見・感想 (カッコ内は回答者職種)

回答内容 (原文ママ)
・とても勉強になっただけに、いい意味で、もっと時間があればと思いました。ありがとうございました。(その他)
・いろいろな障害分野の先生のお話をお聞きすることができて大変ためになりました。見通しをわかりやすくお伝えすることなど、障害のある方が来院された時だけでなく、常に心掛けるようにしたいです。せっかくの機会でしたがだいぶ駆け足の講義だったので、もう少しじっくりお聞きできればよかったと思います。(事務職)
・参加させていただきありがとうございました。合計30分という短時間でしたが、各障害について、概ね理解することができました。もし可能であれば、各障害についての講演を動画にして公開して頂ければ幸いです。参加できなかったスタッフをはじめ、他の医療機関の方々も、いつでも観ることができれば、障害に対する理解が多くの方々に広がり、医療安全の面でも有用だと考えます。どうぞよろしく願いいたします。(研究職)

表3 知識と当事者の声から学ぶタイプの研修の評価

質問項目	回答項目	人数 (人)	割合 (%)
理解しやすさ	とても理解しやすかった	13	(81.2)
	理解しやすかった	2	(12.5)
	どちらとも言えない	1	(6.3)
	やや理解しにくかった	0	(0.0)
	理解しにくかった	0	(0.0)
知らないことを新しく知ることができた	初めて知ることがとても多かった	10	(62.5)
	初めて知ることがそれなりにあった	5	(31.3)
	初めて知ることが少しあった	1	(6.3)
	初めて知ることがあまりなかった	0	(0.0)
	全くなかった	0	(0.0)
研修内容を日常の業務に役に立てられるか	とても役に立つと思う	13	(81.2)
	まあまあ役に立つと思う	2	(12.5)
	どちらとも言えない	1	(6.3)
	あまり役に立たないと思う	0	(0.0)
	全く役に立たないと思う	0	(0.0)

表4 知識と当事者の声から学ぶタイプの研修への意見・感想

回答内容 (原文ママ)	
・	つい本人ではなく、隣にいる人に話しかけてしまいます。患者本人さまの目を見て話して欲しいと言われ、ハッとしました。大変な気づきをいただいて本当にありがとうございました。
・	大きな費用をかけなくても、少しの工夫で障害がある患者さんも含めて誰もが受けやすい医療機関にすることができると感じたスローコミュニケーションや「10時10分前」、二重否定のお話は非常に参考になった。
・	「障害の特性」をわかっておくことが、まず基本であること。視覚障害の方の見え方のちがひ、一番移動で困っておられること。ちょっとした工夫で有効であること。知的障害の方について、医師と家族や付き添いの支援だけで話が終わってしまうことがコミュニケーションがとれずに困っておられること。しっかりと見通して伝えることが安心してもらえること。聴覚障害の方の場合、体験を通して「聞こえないこと」のリアリティを想像することの大切さを実感しました。ちょっとした気づきや心遣いの大切さ、どう工夫するかを話し合っ考えること。リハーサルすることの大切でもわかりました。
・	ろうの人のカーテンを開ける前に気づかいて、カーテンを揺らして入るようにした方がよいということが勉強になった。
・	患者さんが理解できるか確認しながら対応していくことが大切と再確認しました。ろうの患者さんが困っていることなどを理解でき、今後の看護に活かせたいと思いました。
・	目を見ること。
・	ちょっと考えるとその通りなのですが、気づくことが多かったです。わかりやすく説明することは、本当に難しいと思います。
・	伝え方の工夫は今後参考になると思いました。
・	後半からの参加でしたが、10時10分前、や食間の説明、カーテンを開ける時、息を止める時に電気消灯点灯を利用する、通訳等付き添いの方に話しかけるだけでなく本人の目を見て説明する時間を多くするなど気を付けるよう気づかせていただきました。
・	構えてしまったり、スムーズにいかない事がありました。実例をあげて頂いたので分かりやすかったです。区切りを活用あたり、筆談もボードなど用意しておこうと思いました。勉強になりました。ありがとうございました。

表5 より深く学ぶタイプの研修の評価

質問項目	回答項目	人数 (人)	割合 (%)
理解しやすさ	とても理解しやすかった	71	(64.0)
	理解しやすかった	37	(33.3)
	どちらとも言えない	3	(2.7)
	やや理解しにくかった	0	(0.0)
	理解しにくかった	0	(0.0)
知らないことを新しく知ることができた	初めて知ることがとても多かった	47	(42.3)
	初めて知ることがそれなりにあった	53	(47.7)
	初めて知ることが少しあった	11	(9.9)
	初めて知ることがあまりなかった	0	(0.0)
	全くなかった	0	(0.0)
研修内容を日常の業務に役に立てられるか	とても役に立つと思う	84	(75.7)
	まあまあ役に立つと思う	26	(23.4)
	どちらとも言えない	1	(0.9)
	あまり役に立たないと思う	0	(0.0)
	全く役に立たないと思う	0	(0.0)

表6 参考になったこと、初めて知ること、日頃の業務に活かせると感じたこと
 (* 文意を損ねない範囲で文章を簡潔にまとめ、一部のみ掲示)

カテゴリー名	内容の一例	数
【当事者の声からの学び】	・各障害について、当事者の方から具体的に説明していただいたことで援助をイメージできた。	18
【患者さんの立場になる・本人を尊重する】	・患者本人に伝えること、患者の立場になって考えること、本人に支援の方法を相談すること、基本的事をあらためて再確認することができた。	19
【マニュアルの必要性】	・障害がある患者さんが来られた時に役立つマニュアルがあれば、動きやすいと感じた。	2
【知的障害】	・知的障害の方のできることを見つけるということ、心がけていきたい。	1
【視覚障害】	・視覚障害者の方への介助方法。	2
【聴覚障害】	・聴覚障がいの方とのコミュニケーションツールに関して、勉強になった。	2
【分かりやすい伝達の必要性】	・より意識して伝える事、文脈は大切。また、専門用語を解りやすく伝えるのは、健常者も同じですが、より丁寧さが必要。	4
【コミュニケーションの必要性】	・コミュニケーションを取りたい、伝えたい、知ろうとする姿勢を持つことや接し方、伝え方などのポイントがとてもわかりやすかった。	8
【困りごとやニーズへの具体的な対応】	・障害のある患者さんの困り事や求められていること、それらに対する具体的な対応について知ることができた。	5
【障害のある患者さんが利用しやすい・安心しやすい実環境づくり】	・インクルーシブ教育が求められてるように、インクルーシブ医療の充用しやすい・安心しやすい実、環境作りが大切だと思った。「公平」に医療を提供できるような技術の習得が必要である。	5
【災害時の対応】	・災害時の対応も工夫が必要だと気付いた。	1